

## 報告③ 両生類の市民モニタリングの現場

### ～東京都あきる野市横沢入を例に～

久保田繁男・佐久間聡(西多摩自然フォーラム)

横沢入は東京都の西部にある多摩地区のあきる野市に位置し、ちょうど山地と丘陵地が接する地域に当たる。ここは三方を標高約 300m の山に囲まれ、南向きに開けた流域面積約 60ha の谷間で、かつては谷の中央と支流の谷戸で水田が営まれ、山腹の雑木林は薪炭材としてくり返し伐採されてきた典型的な里山環境である。

横沢入のある多摩川と秋川に挟まれた丘陵部は、東京都内の他の丘陵部からニュータウン開発等によって自然が著しく失われてしまったなかで、開発が遅れていたために比較的良好な里山の環境が保たれ、オオタカ、オオムラサキ、トウキョウサンショウウオ、ホタルといった生き物にとって、都内にわずかに残された貴重なすみかの一つとなっていた。横沢入もこの地域における生き物のホットスポットとして、地元のアマチュア自然研究者を中心に認識されていた地域である。

ところが 1989 年、当時の五日市町（現・あきる野市）は、横沢入を計画的に市街化を図る地域に指定し、さらに 1991 年に東京都より中間報告が発表された「秋留台地域総合整備計画」では、この地域の丘陵地に計画の拠点となる住宅や工業地域を複数開発することが謳われ、横沢入も JR 東日本を開発事業者として、900 戸、3000 人分の宅地開発予定地として位置づけられた。

これに対して、計画地域の自然環境を保全するために、1991 年に自然研究者たちを中心に西多摩自然フォーラムが結成され、開発の見直しを求めて活動してきた。その後、バブル崩壊の影響もあって、丘陵部開発の計画はほとんどが中止となった。横沢入も 2000 年に開発計画が中止決定され、その後開発事業者から計画地が東京都に無償譲渡され、2006 年に東京都里山保全地域に指定されている。

西多摩自然フォーラムでは、この地域でオオタカ、オオムラサキ、トウキョウサンショウウオ、カエル、昆虫、植物等のモニタリング調査を行ってきた。調査は市民によって行われ、トウキョウサンショウウオだけでものべ 50 回以上、約 1000 人が参加している。昆虫では、種としての絶滅が懸念されていたヤマトセンブリが 37 年ぶりに国内で再発見されるという大きな成果を上げたが、他にも多くの意味があると考えている。

#### 1. 行政等へ要望を求める際の根拠

開発計画が進められていた段階では、事業者と西多摩自然フォーラム等の市民団体が一つのテーブルにつき、自然環境、土地利用、オオタカ保護について検討委員会がもたれた。検討材料としての市民モニタリングの結果が、事業者が行ったアセスメントのための調査に対し、質・量ともはるかに凌駕していたため、話し合いに於いて常に主導権を保つことができ、開発断念に結びつけることができたと考えている。また、2009 年に起こったアライグマによる両生類への食害については、モニタリングによっていち早く実態を把握し、東京都に対策を要望することにより現在進行中の捕獲調査につながっている。

## 2, 里山保全管理のためのガイドラインづくり

里山の自然は人間の営為によって維持されたものであり、横沢入では東京都里山保全地域に指定される以前の開発事業者が土地を所有している段階から、市民による保全管理の取り組みが行なわれてきた。しかし、こうした行為は生物の生息環境の攪乱も意味しており、その影響を常にモニタリングしながら作業を進めることが不可欠である。横沢入では、トウキョウサンショウウオ、カエル、ホトケドジョウ、トンボ、ヤマトセンブリ等についての生息環境の整備作業が行われているが、いずれもモニタリング結果に基づいて、計画・実施されている。横沢入の里山管理については、多くの市民団体が参加している「横沢入里山管理市民協議会」において、放置すれば遷移が進行し環境が変化してしまう湿地の保全作業が行われるとともに、作業が及ぼす生き物への影響についてモニタリングが行なわれている。

## 3, 教育的効果

モニタリングの多くは一般市民に対して参加を呼びかけている。参加者は生き物とふれあうだけではなく、実際に汗を流してその生息状況を把握することによって、よりいっそうの理解が深まるとともに、保全活動に参加しているという意識を持つことができると考えている。もちろん希少種の生息情報の管理については配慮されている。